

日本統治期における妙心寺派台灣布教の変遷

—— 臨済護國禪寺建立の占める位置 ——

松 金 公 正

はじめに

筆者は「植民地時期台灣における日本佛教寺院及び説教所の設立と展開」⁽¹⁾において日本植民地統治下の台灣に8宗14派の日本佛教が渡台していたことを明かにした。また、台灣布教の最初期において従軍して台灣に渡った僧侶たちがその後の各宗派の布教策策定に重要な役割を果たしていたことを、「關於日据初期日本佛教従軍布教使的活動－以淨土宗布教使橋本定幢『再渡日誌』為例－」⁽²⁾及び「曹洞宗布教師による台灣佛教調査と『台灣島布教規程』の制定－佐々木珍龍『従軍実歴夢遊談』を中心に－」⁽³⁾において論じた。

この従軍した僧侶たちに台灣布教の起源を求める事のできる宗派は、淨土真宗本願寺派・淨土真宗大谷派・曹洞宗・真言宗・日蓮宗・淨土宗の6派であり⁽⁴⁾、いずれの宗派もその後台灣布教を積極的に推し進めた宗派であるといえる⁽⁵⁾。他方、昭和18(1943)年発行の『台灣に於ける神社及宗教』⁽⁶⁾には、前掲の6派以外に臨済宗妙心寺派⁽⁷⁾が台灣本島人に對し盛んに布教活動を展開してきた結果、當時相当の勢力を確立していたことが記されている⁽⁸⁾。それでは、この妙心寺派の台灣布教はどのような形で開始されたのであろうか。

妙心寺派の台灣布教については、胎中千鶴の「日本統治期台灣の佛教勢力」⁽⁹⁾・「日本統治期台灣における臨済宗妙心寺派の活動」⁽¹⁰⁾及び台灣の江燦騰⁽¹¹⁾・王見川⁽¹²⁾・林奇龍⁽¹³⁾等の研究がある。胎中の2篇の研究は植民地統治開始直後より1930年代までの日本佛教の台灣布教動向を妙心寺派を中心として考察したものである。一方、江と王の論稿は、日本植民地時代の台灣佛教の変容過程に焦点をあて、日本佛教が台灣佛教とどのようにかかわりあっていたかのかについて考察を加えている。そのため、とくに大正期以降の台灣南部における妙心寺派と在来佛教との連絡関係の解明にその主眼がおかれており、当時の日台佛教間相互の影響関係を把握する上で非常に有用な研究であるといえる。しかし、日本による植民地統治開始直後における妙心寺派の活動については多く述べられているとはいえない。

このため本稿では、以上の先行研究をふまえた上で、妙心寺派の台湾布教の変容過程を大きく3つの時期に区分し、まず妙心寺派台湾布教がどのように着手されたのかを示し、次いで、なぜ妙心寺派は日本佛教台灣布教史上、最初の本格的日本式伽藍をもつ寺院といわれる鎮南山臨濟護国禪寺⁽¹⁴⁾を建立するに至ったのかという問題を考察したい。そして、その大伽藍の存在が、その後の布教展開とどうかかわっていくことになるかということを示し、妙心寺派が台灣布教をどのように位置づけ、その位置づけがいかに変容していったのか、また、その変容過程において、臨濟寺はいかなる役割を果したのかということについて明かにしていきたい。

第一章 南清布教基地としての臨濟寺

第一節 妙心寺派と南清布教

はじめに述べたように妙心寺派の台灣布教は、曹洞宗や淨土真宗本願寺派とは異なり、従軍した僧侶によって始められたものではない⁽¹⁵⁾。それでは、どのような形で妙心寺派の布教は開始されたのであろうか。

『正法輪』⁽¹⁶⁾等によると、妙心寺派の台灣布教は明治30(1897)年⁽¹⁷⁾に渡台した細野南岳にその端緒を求めることができ、また、この細野を経済的に支援した松本龜太郎⁽¹⁸⁾が果たした役割も重要であったとしている⁽¹⁹⁾。両者がどのような目的をもって布教を始めたのかについては、胎中がその論稿中で『正法輪』に基づき若干の見解を述べている⁽²⁰⁾。そこで胎中は「細野や松本は、渡台当初から台灣をステップとした中国南部地域への進出を企図した」と述べ、両者が台灣を「南清布教」⁽²¹⁾の拠点と位置づけていたことに注目している。

この細野の渡台は個人的なものであったと考えられるが、また、臨濟宗教務本所も明治30(1897)年4月28日付で伊沢紹倫・大崎文溪に琉球・台灣視察を命じている。両者は5月8日に台灣に到着した後、細野と協力し各地を巡視する。伊沢は24日に離台し沖縄へ向かうが、大崎は大陸への根拠地として澎湖布教場を開設することとなった⁽²²⁾。

さて、一方細野であるが、乱れた台灣の現状を目の当たりにし、優れた善智識を台灣に飛錫せしめる必要を感じ、二回にわたる一時帰国の後、明治31(1898)年早春に足利天応とともに再渡台することとなった。とくに本山により任命され、旅費手当等の俸資を得て既に設備されている末寺・別院に赴任するわけではなく、舎宅にも困るありさまであったため、松本の援助によって台北郊外の北投に建てられた虞兆庵を拠点としてようやく台灣における布教を開始することになった⁽²³⁾。後に河尻宗現・高橋醇嶺を加え、細野とともに足利を支えつつ布教活動は推進されていった。しかし、この虞兆庵も大風雨のため7月6日

に倒壊し、その布教は思うように進まなかった。このような中、明治32(1899)年に入ると、足利は松本に「南清巡遊」の意志を告げた⁽²⁴⁾。

明治三十二年の初夏、天應禪師は余を召して云はく、天候漸やく定まりて南方の氣象今や人に可なり、此の好時節に乗じて、我まさに対岸に遊び、遠く南清の仏跡を巡拝して、從上来滴々単伝の祖塔を礼せんとす、吾子も亦奮起して、此の行を与にせは、便宜を得ること大ならむと、

この巡遊に対し当時台湾総督であった児玉源太郎は旅費を贈与し、返礼に訪れた松本に次のような言葉を告げた⁽²⁵⁾。

天應禪師法の為めに遠遊せらるゝと聞き、余も亦大に感興を催せり、由来南清は、古來我国名僧の伝法地にして、禪宗諸祖が番々出世して、正法を興隆せし本地なるに、近世に至りて道法の衰へたること、却て我国よりも甚しきものありとは、一般の世評なり、蓋し俗眼を以て觀察したる表面上の事情は、誠に此の如くなるべしと雖も、真によく法眼を開きて、佛教の真相を洞見せば、果して如何あるべきや、…（中略）…是れ等の觀察は、真正明眼の人に非ずむば能はざることにして、方今世人は我邦の國是たる、日清両国精神界の国交上、密接の関係ある、宗教上の連絡に就ては、頗る冷淡に打過ぎたり、蓋し從前の觀察者其人に乏しく、彼地宗教界の真相を究むるに由なかりしは、余が深く遺憾とせし所なるに、天應禪師此次の行は、觀察者として誠に其人を得たる者なれば、偶までて余が宿昔の缺憾を補ふ者と謂ふべし、且つ吾子が南清通を以て此の行を俱にするは、師が觀察上の便宜を得ること多かるべし、道中互に愛護して、一路平安を祈る旨、天應禪師に伝へらるべしと、

このように児玉は松本に中国南部は禪宗の本地であるにもかかわらず、近世に入り佛教が衰退してしまったという風評を真実かどうか足利天應の法眼を以って見極めて来て欲しいと述べた上で、日清両国民の精神的結合に佛教を用いることができないか考慮している旨告げている。松本は児玉が台灣統治及び南清政策の上で佛教に対して一定の期待感を有していることを知り、感激するとともに今後の援助を要請した。この妙心寺派による南清佛教觀察は明治32(1899)年6月から8月にかけて行われた⁽²⁶⁾。

日本に帰国した松本は児玉の期待に応えるべく各地の臨済宗の寺院を訪ね、日清両国の臨済宗を連合し、お互いの学僧を往来させることなどを建議した⁽²⁷⁾。そしてこの事業を中心となつて推進する僧侶を探すが、賛同し、渡航に応じる僧侶はなかなかうまくみつからなかつた。

みつからなかつた理由として特に注目すべきは、妙心寺派僧侶の台湾布教に対する考え方と松本のそれとの間に大きな差異があつたことがあげられよう。前述したように松本は中国南部へ視察に出発する前、児玉と謁見し、日清両国民の精神的結合において仏教に期待するという児玉の漢族系民教化政策における仏教に対する肯定的意見を聞き、日清両国の佛教徒連合を実行するため一刻も早く福建に布教師を派遣し、事業を開始・発展させたいと考えていた。しかし、それに対し、妙心寺派僧侶側は帰国した松本自身に禪の修業を行わせ、どうして自らが其の任にあたらないのかと松本自身にその任務の推進を担わせようとするのであった⁽²⁸⁾。即ち、この時点では、妙心寺派僧侶の考えは松本の考えとは異なり、南清及び台湾布教の迅速なる開始・発展を求めていなかつたことがわかるのである。

しかし、松本の何回にもわたる説得の結果、明治32(1899)年11月南清・台湾布教協議のための臨済宗十本山管長会議が開かれ、①中国僧侶の日本来遊受入れ、②福州への善智識の派遣等が承諾され、ここによくやく南清布教のアウトラインが決定されることとなつた⁽²⁹⁾。

第二節 梅山玄秀の渡台と円山精舎の創立

次なる問題は台湾布教をいかなる位置づけの下実行するかということであった。松本は、台湾布教の責任者として適當な僧侶を捜し求めるが、多くの僧侶は渡台を望んでいなかつた⁽³⁰⁾。このような状況下において松本が出会つたのが梅山玄秀であった。梅山の渡台については、『台北州下に於ける社寺教会要覽』に「明治三十一年、児玉台湾総督ノ内意ヲ受ケ、布教師十名ヲ引卒シテ渡台」⁽³¹⁾とある。この児玉の「内意」に基づく梅山の渡台という説明は他の資料にも散見するが、児玉が以前から梅山を知つていて特別な要請によって渡台させたと考えることは難しい。『正法輪』・『鎮南記念帖』にみられる梅山と松本との出会いの記録を参照すると⁽³²⁾、梅山の渡台は誰も派遣希望者がいないという状況下において、偶發的に実施されたものと考えられる。また、梅山が渡台した後、児玉からの援助を固辞し、剣潭寺に居住しつづけていたことからもそれは知られる。つまり、後に児玉が梅山に深く帰依していたのが事実であるとしても、それは梅山の渡台後に作られた関係と考えるのが妥当であろう。

渡台後、梅山一行は先ず剣潭寺に入るが、そこは衛生上好ましい場所とは言えず、布教師たちは次々と病魔に斃れていく。これを見かねた松本は児玉と協議し、新寺院を建立す

ることを決意する。梅山は当初「児玉総督法愛の盛意は、篤く受納せりと雖も、山僧当地に來りしより、日尚浅く、未だ一個半個をも教化する能はず、本島土人に対しても未だ寸効もあることなし、而かも自己の為に先づ居宅を造るに忍びず」⁽³³⁾と固辞するが、結局、松本に押し切られる形で細野以来将来囑望の地であった「基隆の川を枕にし沃野千里の景を呑み台北城を一瞬に収む此地占領以後台灣戰病忠死者の骨を埋めし紀念の靈場にして山水の勝を一処に萃む誠に鎮南無双の靈境」⁽³⁴⁾である円山をその建設地として選定し、松本の奔走と児玉の援助により「円山精舎」が完成することとなった。

梅山は「俗人のヲセッカイとうとう出来たかい」と言いつつも明治33(1900)年7月21日ここに移居し、児玉以下数名の居士を招き、答礼会を開催するに至るのである⁽³⁵⁾。梅山と児玉との密接な関係はこの円山精舎の完成以後に本格化したと考えるべきであろう。

さて、梅山一行の布教活動は、この円山精舎の成立によって大きく変化したといえる。それまでは各布教師はともにそれぞれ修禪と托鉢の日々を送っていたのであり、自己の臨済禪の修行がその活動の中心であった。しかし、円山精舎という活動の拠点を手にすることにより、自己の臨済禪の修行のほか民衆教化にも関与していくことになったのである。

第二章 台湾布教センターとしての臨済寺

第一節 南清布教の開始と挫折

さて、この後、梅山は円山精舎を拠点としてどのように布教活動を展開していくのであろうか。

細野・松本による妙心寺派の台湾布教は、本来南清布教の拠点を設立することを目的のひとつとしていたことはすでに述べた通りである。この南清布教については、円山精舎成立前、明治32(1899)年11月の臨済宗各派管長会議においてすでに決定しており、明治33(1900)年3月に本格的に始まることになった。

3月にはすでに渡台していた細野と河尻が台北を出発、福州に入り烏石山を拠点として布教活動を開始した。その後、7月に見性宗般が渡台、8月に福州へ出発した⁽³⁶⁾。『台北州下に於ける社寺教会要覧』⁽³⁷⁾には梅山も烏石山で青年僧侶の養成に努めた後、渡台したという記載があるが、『正法輪』や『鎮南記念帖』などにはこの記述は見られず、梅山がこ



梅山玄秀
（『鎮南記念帖』より）

の地を訪れたかどうかは別にして、長期滞在したことは考えにくい。後世、宗般らの事業と梅山の事業が混同されたものと考えられる。ともあれ、本来の目的である南清布教はここに開始され、円山精舎の南清布教の根拠地としての位置も確立した。

しかし、この後、妙心寺派はその布教方針の転換を迫られることになる。というのも南清布教の中心となることを約束していた天竜寺派管長の峨山昌禎が明治33（1900）年10月に入寂し、12月には宗般も病のため帰国しなければならなくなり⁽³⁸⁾、南清布教継続のためには中心となって事業を推進する僧侶を新たに選出しなければならなくなつたのである。一応、明治34（1901）年5月には渡台布教経験のある足利が宗般に代わり渡台、11月に福建へ渡り、これによって問題は解決したかにみえた。しかし、翌明治35（1902）年冬に足利は寺院の継承問題から日本に戻らねばならなくなり、後継者を失った妙心寺派の南清布教は撤退を余儀なくされたのである。

ここに至り臨済寺は南清布教への根拠地という本来の目的を喪失してしまうことになり、新たな存在理由を模索することになった。そして、以後次第にその活動の中心を台湾布教へと変化させていくことになったのである。

第二節 児玉源太郎薨去から臨済寺の落慶まで

明治37（1904）年、日露戦争が勃発する。この頃にはすでに梅山と児玉との間に密接な関係があったことは、梅山が児玉に請われて僧侶とし従軍布教したことからもわかる⁽³⁹⁾。

戦争終結後、児玉は明治38（1905）年12月30日に台湾に凱旋した。翌明治39（1906）年元旦、児玉は台湾神社参拝の帰り臨済寺を訪問し、「自然の因縁に依りて、我れ之れが施主となりて造り上マサけたるは、ただ此の一小精舎なり…（中略）…惟ふに和尚奮發一番して伽藍を大成しては如何と」と述べ、本格的な寺院の建立を梅山に提案した⁽⁴⁰⁾。これを受け臨済寺は同年2月より本堂及び庫裡建設費の募集に着手し、福田会を組織することとなった。このように児玉の援助による発展を約束されたかにみえた臨済寺であったが、総督を辞任し日本に帰国した児玉は、同年7月24日に急死し、臨済寺は大檀越を失うことになった。

梅山は児玉の死後、7月28日に臨済寺で追悼会を開き、続いて9月10日に満中会を営み、佐久間左馬太総督・後藤新平民政長官等文武顕官来臨の下、大仏事を奉行し、児玉と臨済寺の因縁及び最後に來訪した際の伽藍建立の默契を詳説し、臨済寺伽藍の整備が児玉の遺志であったことを述べた⁽⁴¹⁾。翌明治40（1907）年7月5日には、児玉に対する供養のための聞蓮会を臨済寺で開き、ちょうど当日地方官会議で台北に集っていた各地方官を招いて、建立に

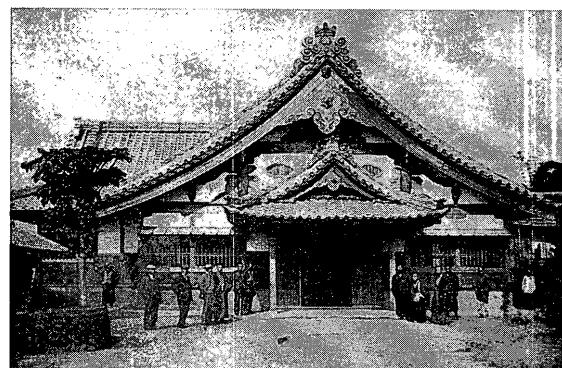
あたって協力を求め、伽藍建設の資金援助を要請し、資金募集に着手するのである。即ち、梅山は児玉の死去を契機として児玉の遺志としての臨済寺の整備を推進していくのであった。

明治41 (1908) 年4月15日に当局より明治42 (1909) 年12月31日までの募集が許可されたが、結局期日までに予定額を募集することができず、募集期間の延長を当局に申請するに至った。第一回目の延長が明治43 (1910) 年12月まで、第二回目が明治44 (1911) 年12月までと二回にわたり延長申請を行い、なかなか資金が集まらず苦労した様子を窺い知ることができる⁽⁴²⁾。このことは、梅山の弟子であり後に台南で布教活動をおくことになる則竹玄敬の回顧録からも知られる⁽⁴³⁾。当局も明治44 (1911) 年の募集期間延長申請の際は、民衆に与える悪影響を心配し延長に難色を示し、不許可を検討したが、最終的には同年2月23日に特別に許可するに至った⁽⁴⁴⁾。また、延長申請を繰り返す中、梅山をはじめ勧進に奔走する布教師は台湾本島人にも協力を要請し、一部その獲得に成功するなど⁽⁴⁵⁾、ここにそれまで陸軍墓地の守護や日本人布教を中心についていた臨済寺の布教活動に新たな変化が起き、台湾本島人との関係の発端を垣間見ることができる。

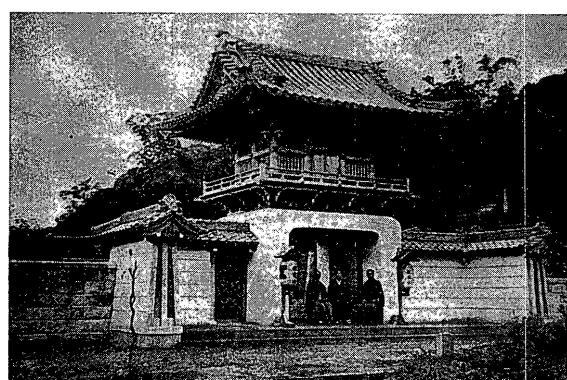
明治43 (1910) 年5月には庫裡が完成、10月に上棟式を行い、また、豊川閣も同年6月



本堂
(『鎮南記念帖』より)



庫裡
(『鎮南記念帖』より)



山門
(『鎮南記念帖』より)

に上棟、10月には稻荷の鎮座式を挙行した。そして、明治44(1911)年、ついに本堂が完成し、台湾における妙心寺派の根本道場たる臨済寺は、明治45(1912)年6月20日に妙心寺派の管長代理として坂上宗詮を迎えて、入仏式を執り行い、24日には開基児玉源太郎の七回忌法要を行った。もちろん山号が鎮南山と名づけられたことからもわかるように、まだ南清布教の可能性は完全に忘却されてはいないが、当初の目的とは異なり、それはあくまで将来的、希望的目標であり、この後妙心寺派は臨済寺を台湾布教のセンターと位置づけ、台湾本島での布教活動を展開していくことになるのである。

第三章 台湾本島人の「根本道場」としての臨済寺

第一節 歴代住職と臨済寺

さて、それでは伽藍完成後の臨済寺はどのように布教活動を展開していったのであろうか。先行研究の中で胎中も林も梅山以降の住職に関する資料の乏しさを嘆いているが、現存する「僧籍台帳」⁽⁴⁶⁾によれば、臨済寺歴代住職は以下の表1のようになる⁽⁴⁷⁾。

表1 臨済寺歴代住職一覧表

氏 名	就 任 期 日	辞 任 期 日	主 な 出 来 事
梅 山 玄 秀	明治33(1900)年7月21日 (入山期日)	大正3(1914)年6月	明治33(1900)年 円山精舎完成 明治39(1906)年 児玉源太郎の追悼会 明治40(1907)年 聞蓮会開催 明治45(1912)年 臨済寺入仏式
長 谷 慈 圓	大正3(1914)年6月	大正7(1918)年12月4日	大正5(1916)年 鎮南学林発足 大正7(1918)年 仏教道友会認可 大正8(1919)年 丸井圭治郎鎮南学林長就任
山 崎 大 耕	大正8(1919)年4月23日	大正10(1921)年4月4日	大正9(1920)年 凌雲禪寺妙心寺派正式帰属
天 田 策 堂	大正10(1921)年4月4日	大正12(1923)年2月27日	大正11(1922)年 鎮南学林閉鎖
平 松 亮 卿	大正12(1923)年2月27日	大正12(1923)年6月25日	
天 田 策 堂	大正13(1924)年1月29日	昭和2(1927)年2月21日	大正14(1925)年 鎮南日曜学校創立 大正14(1925)年 『円通』発刊 大正15(1926)年 臨済宗総本部教務所を台南開元寺に設置
吉 田 万 籍	昭和2(1927)年2月21日	昭和4(1929)年4月30日	
坂 上 鈍 外	昭和4(1929)年4月30日	昭和7(1932)年1月18日	
高 林 玄 宝	昭和7(1932)年1月18日	昭和14(1939)年9月20日	昭和9(1934)年 仏教専門道場設立 台湾仏化青年会 昭和11(1936)年 稲江幼稚園設立 昭和12(1937)年 『台湾仏化』発刊
森 元 成	昭和14(1939)年9月20日	昭和17(1942)年5月28日	
飯 塚 江 巍	昭和17(1942)年5月28日	昭和21(1946)年5月25日	

上記表1より梅山の後を引き継いだ長谷・山崎の時代に本島人僧侶養成のための鎮南学林を創立し⁽⁴⁸⁾、鎮南学林経営の財的基盤として仏教道友会を設立⁽⁴⁹⁾することになったことがわかる。大正9(1920)年には凌雲禪寺が正式に妙心寺派に帰属しており、沈本円との連携⁽⁵⁰⁾もこの時期に進められており、梅山以降の臨済寺は台湾本島人に対する布教を強く意識していたことがわかるのである。

第二節 本島人布教と妙心寺派

ここでは梅山が臨済寺を創設した以降の教線の拡大について寺院・説教所（布教所）の地方展開と信徒獲得への変遷について述べていきたい⁽⁵¹⁾。

まず、下記表2は、明治30(1897)年から昭和17(1942)年にかけての妙心寺派の教務所・寺院・説教所数の変遷を『台灣總督府統計書』⁽⁵²⁾により整理したものである⁽⁵³⁾。この表に基づいて妙心寺派の地方展開を整理していきたい。

表2 明治30(1897)年－昭和17(1942)年 臨済宗妙心寺派教務所・説教所・寺院数の変化

	教務所	説教所	寺院	妙心寺派台灣布教に関する主要事項
明治30(1897)年	—	—	—	細野南岳渡台。大崎文溪澎湖布教開始。
明治31(1898)年	—	1	—	北投貢兆庵創設。基隆布教所設置。
明治32(1899)年	—	1	—	足利天応南清視察。梅山玄秀渡台。
明治33(1900)年	—	2	—	円山精舎完成。梅山提出の寺院設立願認可。 大悲閣布教所設置。見性宗般福州派遣。 峨山昌禎死去。
明治34(1901)年	—	2	—	円山陸軍合葬墓地墓標除幕式挙行。 見性宗般福州を離れ帰国。 足利天応福州派遣。
明治35(1902)年	—	1	—	円山陸軍墓地第一回祭典挙行。 足利天応福州を離れ帰国。
明治36(1903)年	—	3	1	
明治37(1904)年	1	3	1	
明治38(1905)年	—	3	1	
明治39(1906)年	—	3	1	児玉源太郎死去。福田会組織。
明治40(1907)年	—	3	1	聞蓮会開催。
明治41(1908)年	—	3	1	
明治42(1909)年	—	3	1	
明治43(1910)年	—	2	1	妙広寺認可。基隆布教所設立認可。 臨済寺庫裡落成、豊川閣稻荷鎮座式挙行。
明治44(1911)年	—	3	1	臨済寺本堂、豊川閣落成。
明治45(1912)年	1	3	1	臨済寺入仏式。児玉源太郎七回忌法要。 花蓮港布教所、双連布教所設置。

	教務所	説教所	寺 院	妙心寺派台湾布教に関する主要事項
大正 2 (1913)年	1	3	1	
大正 3 (1914)年	1	4	2	
大正 4 (1915)年	1	3	2	
大正 5 (1916)年	—	5	3	北投布教所設置。大仙岩妙心寺派に編入。 鎮南学林発足。
大正 6 (1917)年	—	5	3	東台禪寺認可。新城布教所設置。
大正 7 (1918)年	—	5	3	仏教道友会認可。
大正 8 (1919)年	—	6	3	塩水布教所、埔里布教所設置。
大正 9 (1920)年	—	6	4	凌雲禪寺妙心寺派正式帰属。 高山頂布教所設置。
大正10(1921)年	—	7	4	
大正11(1922)年	—	6	4	鎮南学林閉鎖。
大正12(1923)年	—	6	4	龍泉禪寺設立。
大正13(1924)年	—	6	4	円覺禪寺設立。
大正14(1925)年	—	8	4	屏東布教所、台南布教所設置。 鎮南日曜学校創立。
大正15(1926)年	—	7	6	大稻埕布教所、士林布教所設置。 宝覺禪寺設立。
昭和 2 (1927)年	—	8	6	
昭和 3 (1928)年	1	8	7	妙善禪寺認可。
昭和 4 (1929)年	1	8	7	円覺禪寺認可。嘉義布教所設置。
昭和 5 (1930)年	1	7	9	東山禪寺、昭慶禪寺認可。
昭和 6 (1931)年	1	7	10	二水布教所設置。
昭和 7 (1932)年	1	7	11	大慈寺設立。
昭和 8 (1933)年	1	7	12	
昭和 9 (1934)年	1	9	13	鉄真院認可。岡山布教所、鳳林布教所設置。
昭和10(1935)年	1	10	13	大橋布教所設置。
昭和11(1936)年	—	10	13	赤崁布教所設置。
昭和12(1937)年	—	11	13	鳳山寺認可。明德布教所、旗山布教所設置。
昭和13(1938)年	—	11	13	北埔布教所設置。
昭和14(1939)年	—	12	13	
昭和15(1940)年	—	11	14	昭明禪寺、達磨寺認可。
昭和16(1941)年	—	11	15	
昭和17(1942)年	—	11	15	

(典拠) 各年度『台灣總督府統計書』(台灣總督官房調査課発行) による。

一般的に妙心寺派の台湾布教の展開において重視されるのは大檀越である児玉源太郎の援助と保護、そして総督府との密接な関係である。たしかに、妙心寺派は児玉との関係を基礎として台湾で初めての本格的日本式伽藍を有する寺院を創設したのは間違いない。しかし他方、表2の明治31 (1898) 年から大正2 (1913) 年の統計をみてみると、寺院はいま

だ台北の臨済寺ひとつしかなく、大正2（1913）年以前は、あまり積極的に地方へ教線を拡大していったとはいえない。渡台以後台湾における布教を積極的に推進していた浄土真宗本願寺派や曹洞宗・浄土宗などが次々と地方中枢都市に説教所を設置していく⁽⁵⁴⁾のとは非常に対照的である。

このように地方展開がおくれた原因としては、前述したように台湾未曾有の大伽藍を建設していたことが挙げられよう。当時妙心寺派は伽藍建設に全力を投入しており、募金も思うように集まらない状況下においては、地方へ布教活動を展開する財務的余裕も人的余裕もなかったと考えられる。例外的に澎湖と花蓮に説教所を設置しているが、澎湖は台北と同様に南清布教への中継点を意識して明治30（1897）年に大崎文溪を派遣して以来⁽⁵⁵⁾、本島人の廟宇を利用する形で成立したものであり、植民地統治開始当初より独自の布教活動を展開していた。また、花蓮も形式的には梅山玄秀を開山としているが、その実『続禅林僧宝伝』第二輯卷之下の「台北府臨済寺得庵禪師伝」によると荒井泰三という居士によって建てられたものとあり、設立後に梅山を開山として迎えるという形をとったものといえ、臨済寺独自の教線拡大とはいえない。

もちろん、伽藍建立の計画以前になぜ地方への布教が遅れていたかという疑問は残るが、『鎮南記念帖』に「かくて南清布教の事は茲に廃絶せしと雖も此の事業の副産物たりし鎮南道場の創始は、得庵老師健在せしが為めに、法道漸次流通して」⁽⁵⁶⁾とあり、松本のこの言葉によって、当時の妙心寺派の台湾本島布教に対する態度を理解することが可能であろう。台北の道場は、本来、南清布教の拠点のために設立されたものであり、いいかえれば、南清への中継地に過ぎず、台湾本島そのものの布教は「副産物」とみなされていたことがここから明らかになるのである。したがって、明治35（1902）年以前は、台湾本島への布教はそれほど重要視されていなかったとしても不思議ではない。

それでは、その後、妙心寺派はいかなる形で台湾本島への布教を推進していったのであろうか。

図1は先述の寺院・説教所の設立数等をもとに作成した明治28（1895）年から昭和17（1942）年にかけての妙心寺派の寺院・説教所（布教所）の地方展開を現在判明する範囲内で復元したものであり、図2はそれを台湾の地図上に明治31（1898）年から5年ごとに図示したものである。これによると、次のように妙心寺派の布教過程は大きく三段階に分けることが可能である。

まず、第一期は、領台初期から大正初期までである。この時期妙心寺派は、臨済寺の建

図1-① 臨濟宗妙心寺派の寺院・説教所（布教所）設立表（●説教所、○寺院）

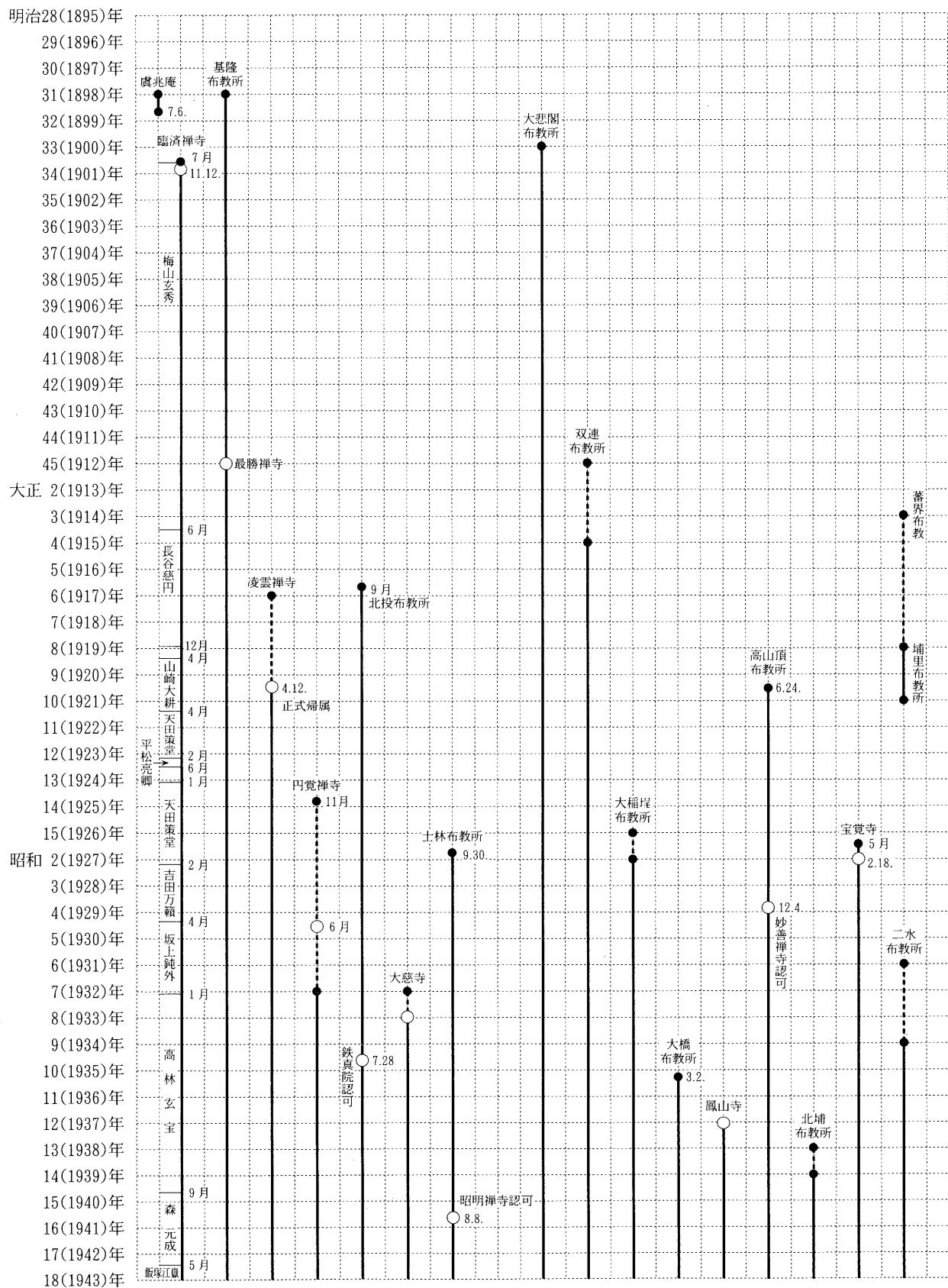


図1-②

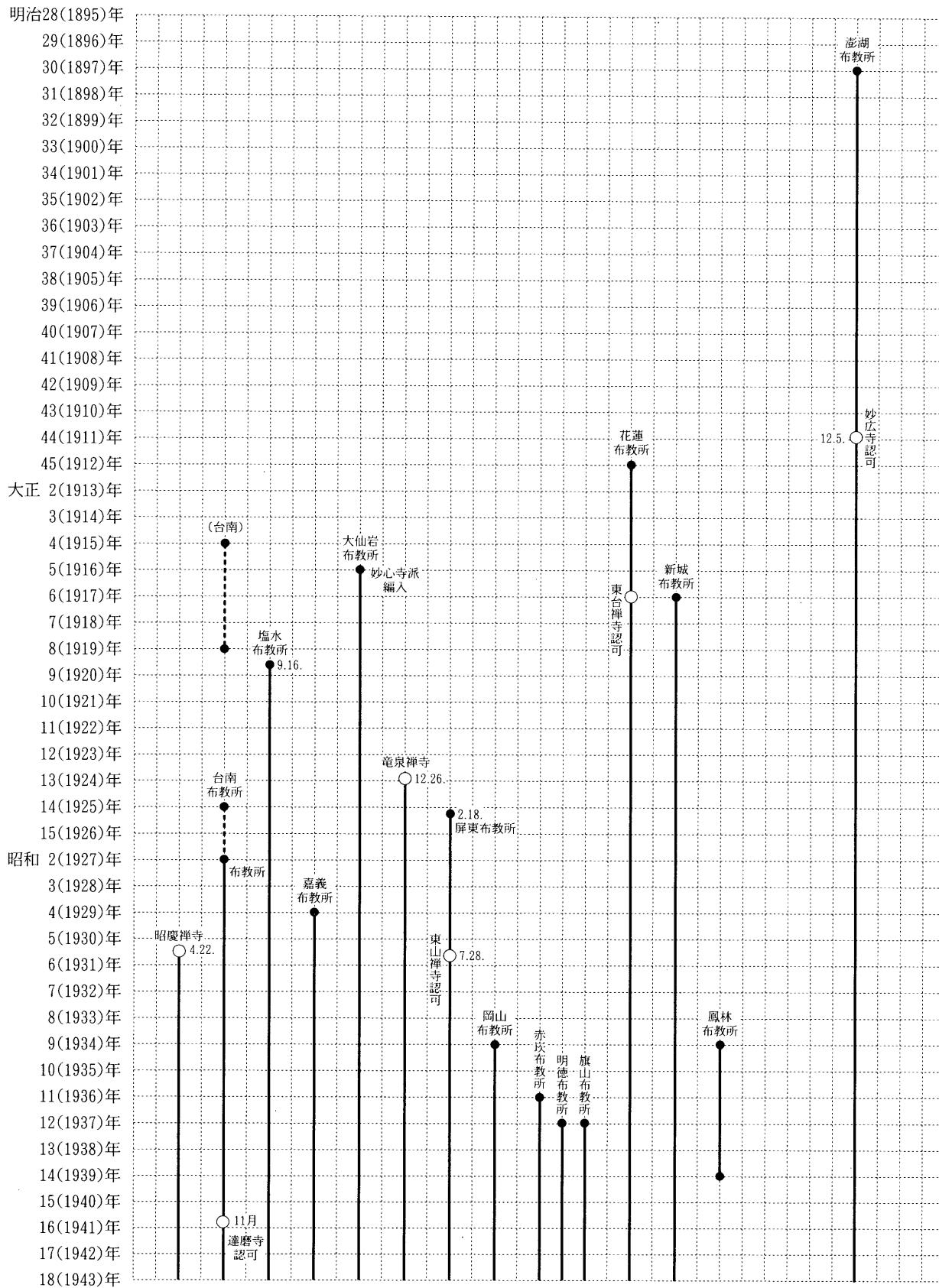


図2—① 臨済宗妙心寺派の地方展開

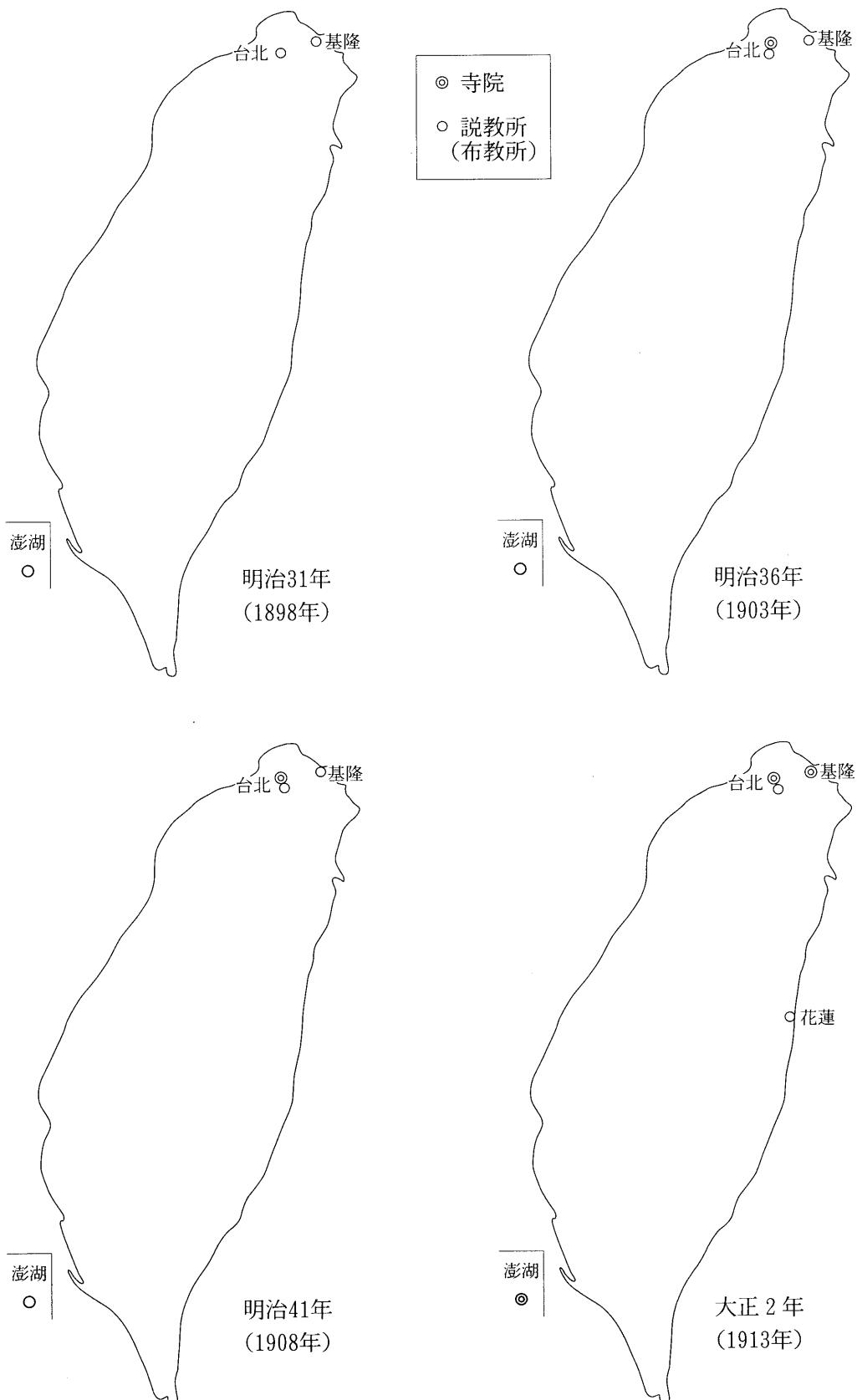


図2—②

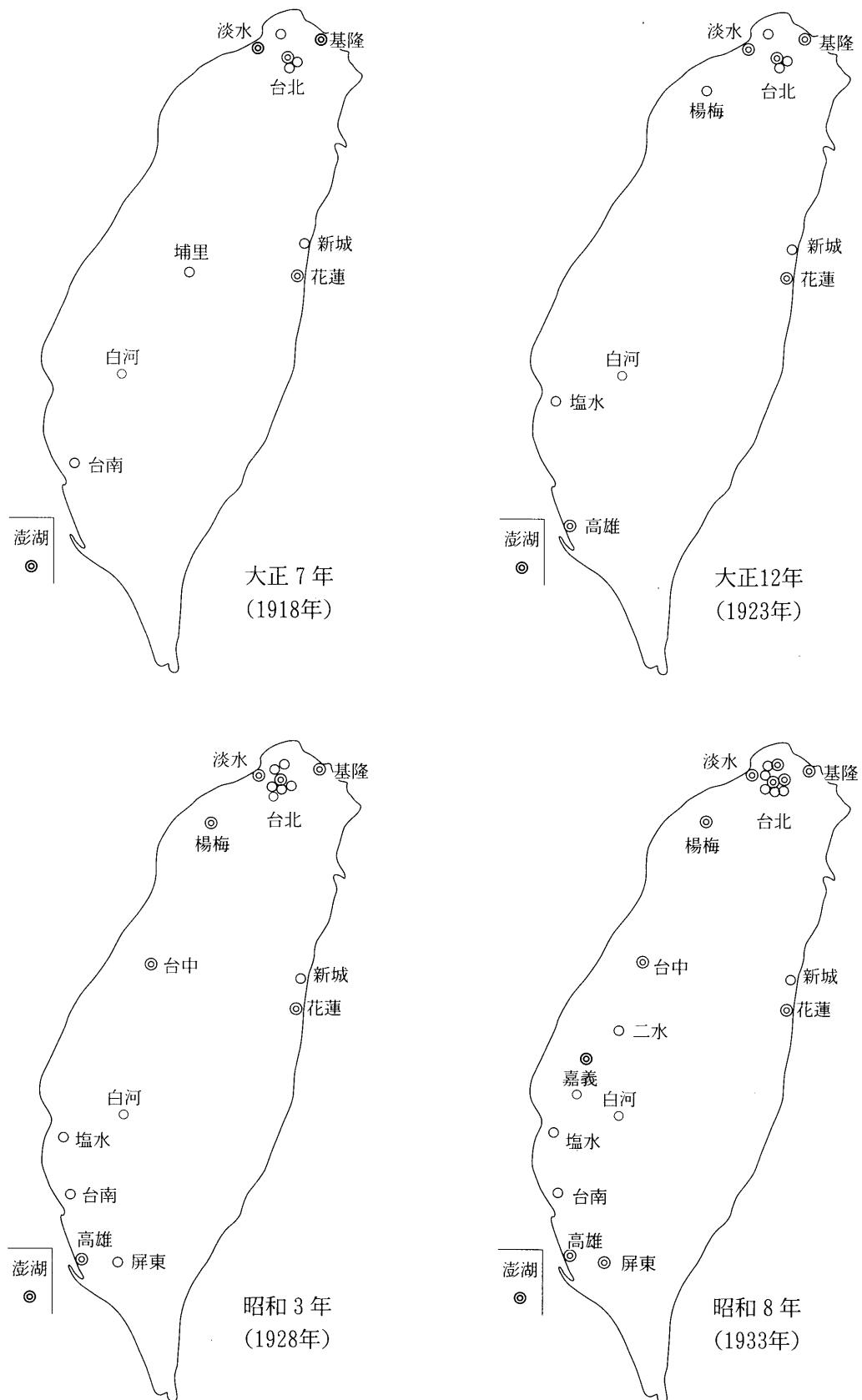
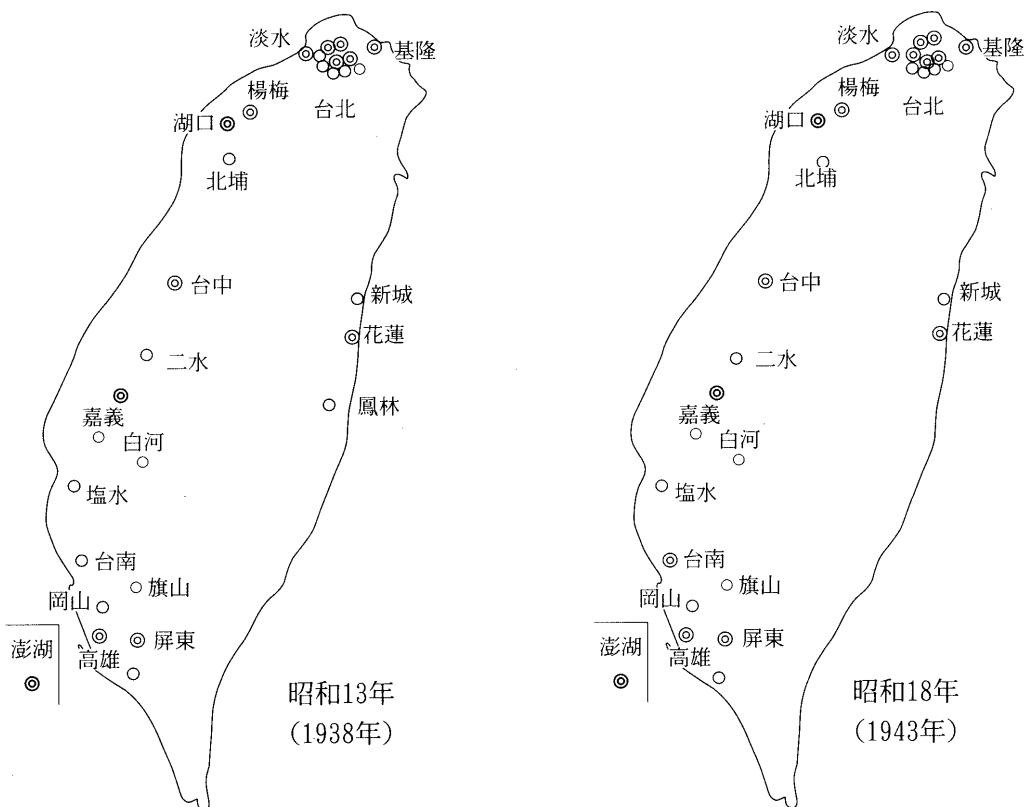


図 2-③



立に全力をそそぎ他宗派に先駆けて非常に早い段階で本格的日本式伽藍を有する布教拠点を設立することに成功した。しかし、地方への布教展開は台北・澎湖・花蓮に止まり、大正初期まで教線拡大があまり望めなかつたことがわかる。

第二期は、大正時期である。梅山の後任となった長谷や山崎は、それまで曹洞宗の僧籍にあった台湾本島人佛教界の中心人物の一人である沈本円を妙心寺派内にとりこむことに成功し、台湾本島人僧侶と連絡関係を結び本島人へ布教を試みるようになる。

第三期は、大正末期から終戦までである。地方展開を試みた妙心寺派であったが、すでに浄土真宗本願寺派や曹洞宗・浄土宗などが旧来の台湾本島人の手によって作られた有名寺院を押さえていた北部・中部地域ではその発展に限界があったようである。そのため、高林玄宝・東海宣誠らは、布教の焦点を南部地区におき、南部地域を中心に本島人僧侶との連絡関係を拡大していくのである⁽⁵⁷⁾。

しかし、このような本島人を布教の中心にすえるという考え方はすでに領台初期から各宗派において主張されていたものであり、妙心寺派唯一のものではない。浄土宗などでは従軍慰問使として渡台した橋本定幢も本山へその意向を示していたことは拙稿において示した⁽⁵⁸⁾。妙心寺派も例外ではなく、『正法輪』には「台湾の布教に就て」⁽⁵⁹⁾など早くから

そういった主張が見られる。高林や東海が成功裏に事業を展開し得たのは、他宗派がその方針を変更し、内地人布教へとその活動の中心を移行させていく中、本島人への布教方針を堅持し、また、地方へと展開を開始する以前に、台北において本島人僧侶との連絡関係形成の基礎ができていたためと考えられる。

第三節 内地人・本島人信徒数の変遷

最後に信徒数の変遷について見ていただきたい。下の表3は明治31(1898)年から昭和17(1942)年にかけての妙心寺派および曹洞宗の本島人・内地人信徒数の変遷を『台湾総督府統計書』にもとづき一覧表にしたものであり、図3はそれをグラフ化したものである。また、表4は大正12(1923)年から昭和17(1942)年にかけての妙心寺派の各地域別信徒数である。

曹洞宗と比較すると明治・大正期の妙心寺派信徒数が内地人・本島人ともにかなり少ないことがわかる。大正期に入り、妙心寺派の信徒数は次第に増加するが、曹洞宗の信徒数と比較すると、大正12(1923)年時点で4分の1にもみたないのである。

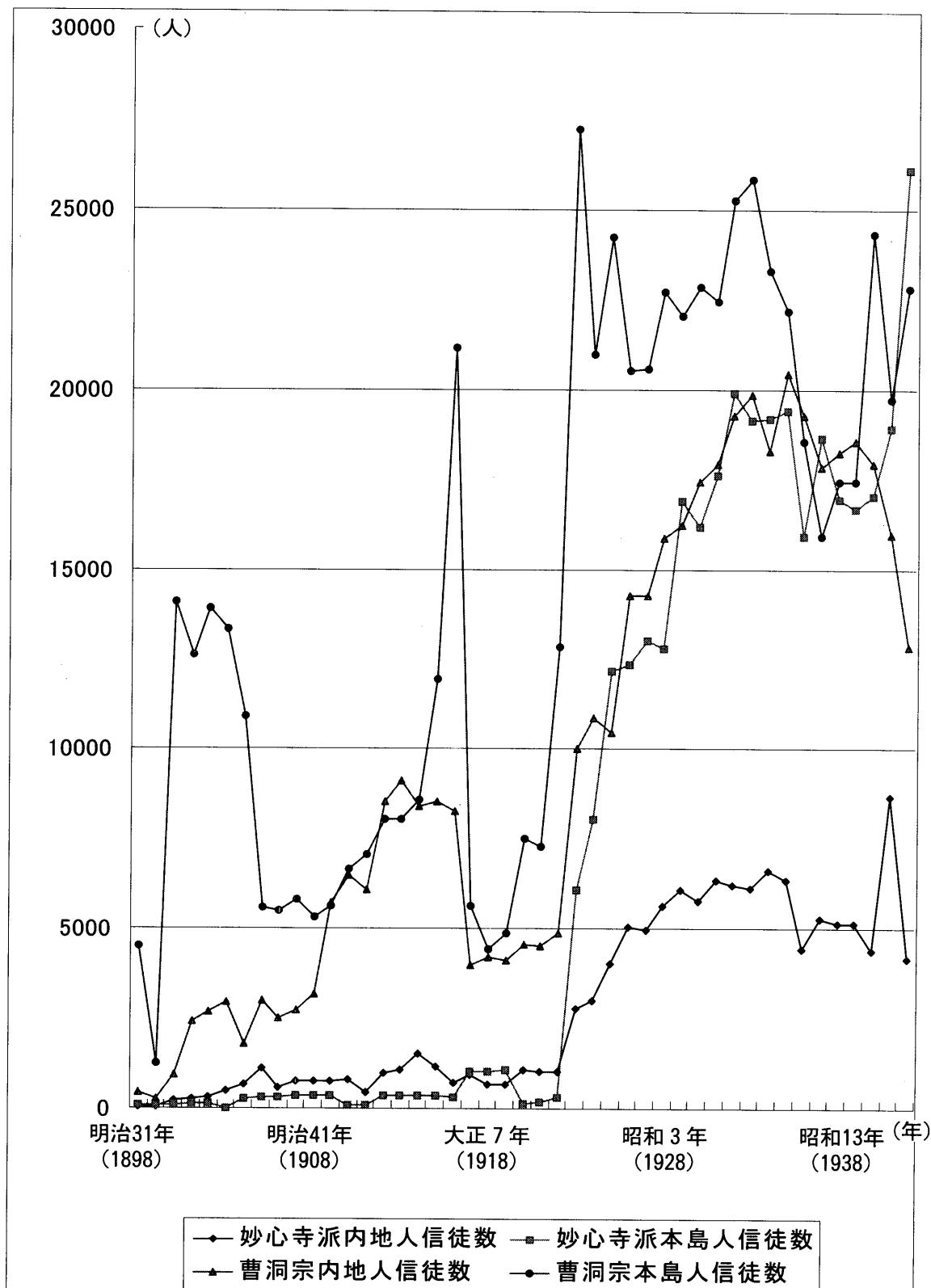
表3 明治31(1898)年－昭和17(1942)年 臨済宗妙心寺派及び曹洞宗信徒数の変遷

	臨 濟 宗			曹 洞 宗		
	内地人	本島人	合 計	内地人	本島人	合 計
明治31(1898)年	25	76	101	425	4532	4957
明治32(1899)年	38	73	111	283	1258	1541
明治33(1900)年	230	82	312	933	14071	15004
明治34(1901)年	265	130	395	2429	12598	15027
明治35(1902)年	328	139	467	2669	13890	16559
明治36(1903)年	495	—	495	2936	13321	16257
明治37(1904)年	675	250	925	1776	10891	12667
明治38(1905)年	1110	333	1443	2986	5570	8556
明治39(1906)年	590	335	925	2509	5495	8004
明治40(1907)年	751	338	1089	2736	5810	8546
明治41(1908)年	765	337	1102	3165	5299	8464
明治42(1909)年	765	337	1102	5735	5643	11378
明治43(1910)年	812	82	894	6488	6662	13150
明治44(1911)年	432	97	529	6061	7084	13145
明治45(1912)年	978	357	1335	8557	8049	16606

	臨 濟 宗			曹 洞 宗		
	内地人	本島人	合 計	内地人	本島人	合 計
大正 2(1913)年	1052	376	1428	9113	8041	17154
大正 3(1914)年	1525	375	1900	8389	8592	16981
大正 4(1915)年	1180	370	1550	8531	11937	20468
大正 5(1916)年	735	305	1040	8251	21169	29420
大正 6(1917)年	950	1020	1970	3975	5636	9611
大正 7(1918)年	660	1020	1680	4183	4436	8619
大正 8(1919)年	680	1085	1765	4094	4875	8969
大正 9(1920)年	1080	140	1220	4540	7504	12044
大正10(1921)年	1040	163	1203	4509	7287	11796
大正11(1922)年	1030	297	1327	4858	12830	17688
大正12(1923)年	2768	6092	8860	9996	27232	37228
大正13(1924)年	2975	8068	11043	10875	20956	31831
大正14(1925)年	4039	12170	16209	10465	24219	34684
大正15(1926)年	5054	12321	17375	14282	20522	34804
昭和 2(1927)年	4951	12992	17943	14269	20580	34849
昭和 3(1928)年	5623	12773	18396	15850	22733	38583
昭和 4(1929)年	6081	16901	22982	16225	22055	38280
昭和 5(1930)年	5776	16186	21962	17415	22867	40282
昭和 6(1931)年	6354	17624	23978	17914	22422	40336
昭和 7(1932)年	6233	19885	26118	19250	25243	44493
昭和 8(1933)年	6127	19142	25269	19864	25853	45717
昭和 9(1934)年	6622	19181	25803	18293	23292	41585
昭和10(1935)年	6371	19416	25787	20422	22188	42610
昭和11(1936)年	4431	15933	20364	19284	18568	37852
昭和12(1937)年	5265	18622	23887	17849	15928	33777
昭和13(1938)年	5151	16966	22117	18222	17453	35675
昭和14(1939)年	5144	16656	21800	18555	17436	35991
昭和15(1940)年	4370	17044	21414	17918	24318	42236
昭和16(1941)年	8670	18919	27589	15941	19723	35664
昭和17(1942)年	4150	26099	30249	12848	22786	35634

(典拠) 各年度『台灣總督府統計書』(台灣總督官房調查課)による。

図3 明治31(1898)年－昭和17(1942)年、臨済宗妙心寺派・曹洞宗信徒数の比較



(典拠) 各年度『台湾総督府統計書』(台湾総督官房調査課)による。

表4 大正12(1923)年—昭和17(1942)年 臨濟宗妙心寺派信徒数変遷(地域別)

		説教所	台北	新竹	台中	台南	高雄	澎湖	花蓮
大正12年 (1923)	内地人	988	1285	—	—	—	180	—	315
	本島人	447	5545	—	—	—	100	—	—
大正13年 (1924)	内地人	775	1680	—	—	—	200	—	320
	本島人	484	7584	—	—	—	—	—	—
大正14年 (1925)	内地人	1264	2090	—	—	—	195	—	490
	本島人	1391	10779	—	—	—	—	—	—
大正15年 (1926)	内地人	1451	2941	—	—	—	22	150	490
	本島人	1441	10560	—	—	—	320	—	—
昭和2年 (1927)	内地人	1186	3100	—	—	—	22	150	493
	本島人	1876	10766	—	—	—	350	—	—
昭和3年 (1928)	内地人	2528	2545	—	—	—	—	150	400
	本島人	1013	10220	180	—	—	1350	—	10
昭和4年 (1929)	内地人	2666	2765	—	—	—	—	250	400
	本島人	2073	12878	520	—	—	1420	—	10
昭和5年 (1930)	内地人	2353	2965	—	—	—	—	148	310
	本島人	1483	11948	505	—	120	2030	—	100
昭和6年 (1931)	内地人	2389	2965	—	—	—	—	650	350
	本島人	1482	11948	520	844	120	2680	—	30
昭和7年 (1932)	内地人	2375	3018	—	—	—	—	360	480
	本島人	1643	12775	520	1150	120	3627	—	50
昭和8年 (1933)	内地人	1989	3158	—	—	—	—	480	500
	本島人	1779	12772	520	1251	120	2650	—	50
昭和9年 (1934)	内地人	2399	3300	—	—	—	—	373	550
	本島人	1991	12800	520	1300	120	2400	—	50
昭和10年 (1935)	内地人	2415	3016	—	—	—	—	380	560
	本島人	2115	12863	520	1327	120	2411	—	60
昭和11年 (1936)	内地人	1011	2389	—	—	—	—	380	651
	本島人	3056	8772	520	1328	120	2074	—	63
昭和12年 (1937)	内地人	1806	2517	—	—	—	—	380	562
	本島人	5704	8782	520	1330	120	2074	—	92
昭和13年 (1938)	内地人	1504	2667	—	—	—	—	380	600
	本島人	4789	8433	520	786	120	2220	3	95
昭和14年 (1939)	内地人	1312	2947	—	—	—	—	380	505
	本島人	6013	6976	520	802	130	2120	—	95
昭和15年 (1940)	内地人	900	2468	—	—	—	22	380	600
	本島人	8254	5303	520	851	200	1801	20	95
昭和16年 (1941)	内地人	757	6800	—	—	208	35	370	500
	本島人	9585	5300	530	1121	512	1801	20	50
昭和17年 (1942)	内地人	1730	1170	—	—	316	19	370	545
	本島人	13029	3835	400	635	4037	4088	20	55

(典拠) 各年度『台湾総督府統計書』(台湾総督官房調査課)による。

しかし、大正末期から昭和期にかけて本島人信徒の獲得に成功し、急激に増加する。本島人の信徒数に限れば、昭和12（1937）年には曹洞宗の信徒数を超過し、昭和17（1942）年には最高およそ26000人あまりの本島人信徒を数えることになった。台北・花蓮・澎湖といった植民地統治開始初期から大正初期にかけて妙心寺派が説教所を設置した地域では内地人信徒が多い。とくに花蓮の東台禪寺・澎湖の妙広寺は大部分が内地人信徒である。それに対し、大正期以降に布教活動を展開した新竹・台中・台南・高雄などはその信徒の大多数を台湾本島人が占めており、これは前節で述べたように大正期以降妙心寺派の布教の重点が本島人におかれていたことを裏づけるものといえる。

おわりに

妙心寺派の台湾布教は本来、南清布教の根拠地として台湾を捉えた上で開始されたものであり、そのため臨済寺は当初、南清布教の根拠地もしくは中継地としての機能をもつとともに台湾在住の漢族系民に対する布教・教化を強く意識していた。

しかし、妙心寺派が南清布教から撤退せざるを得なくなった後、臨済寺は大きな転換点を迎える。児玉源太郎という大檀越をもつ梅山玄秀は台北に設立されていた円山精舎を台湾布教の中心道場として位置づけ、台湾に今までにない大規模な伽藍整備を進めていこうとしたのである。

他宗派が各地方へと展開していく一方、妙心寺派は児玉の死を契機として円山に大伽藍を建設することに専心することとなった。その募金活動は当初各界からの支援をみるが、次第に限界を迎え、総督府当局側からも批判を受けるようになる。このため、支援を内地人のみではなく台湾本島人にも広げていくこととなり、このような中、次第に本島人との関係も密接になっていくのである。そして、明治44（1911）年に本堂が落成し、台湾初の本格的日本式伽藍を有する寺院が出現するに至ったのである。

伽藍完成後、各地方への教線拡大を試みようとするが、ここで問題となったのは、その地方展開の遅れであった。従軍した僧侶以来の台湾布教実績をもつ他宗派は、すでに布教活動を地方都市へと展開しており、妙心寺派が教線をのばすことはかなり難しかったと考えられる。そこで、妙心寺派がとった方針が完成した臨済寺を台湾本島人の布教の「根本道場」とすることであった。

梅山の後任となった長谷慈円や山崎大耕等の布教師たちはこの完成した臨済寺というハードウェアをいかんなく利用して各種布教活動を展開した。臨済寺に附属させる形で鎮南学

林を創設し、仏教道友会や婦人会なども組織していったほか、一時曹洞宗の僧籍に入っていた沈本円の妙心寺派帰属に成功するなど、本島人僧侶との連携を積極的に図ることとなつた。すなわち、妙心寺派の台湾布教においては、布教着手の遅れが、早期寺院建立へと連環し、そして早期における寺院設立が本島人布教の展開に大きな影響を果たしたといえるのである。

長谷・山崎の時点ではこれらの本島人への布教活動は台北に限定されていた。しかし、後に高林玄宝・東海宣誠の時代になると中心を臨済寺におきつつ、南部へと教線を拡大し、さらなる展開をみせることとなる。とくに東海については、すでに若干の先行研究が存在するが、いずれも東海の個人的な布教活動のみを扱い、東海の布教活動と彼以前の妙心寺派台湾布教とのつながりを主題としてはいない。そのため、妙心寺派台湾布教における東海の位置づけについては、さらに考察する必要があるが、本稿では触れることができなかつた。この点は稿を改めて論じることといたしたい。

註記

- (1) 『台灣史研究』16, 台湾史研究会, 1998。また、8宗14派の内訳については、同論文頁16-17を参照。なお、本稿に研究動向を加筆し、中国語にて発表した論稿が「日据時期日本佛教之台湾布教」(『円光佛学学報』3, 円光出版社, 1999)である。
- (2) 『円光佛学学報』3, 円光出版社, 1999。なお、植民地統治初期の浄土宗の布教については、台湾省文献委員会主催の「第三屆台灣總督府公文類纂學術研討会」(2001.8.15-16)において「日本殖民地統治初期的日本人僧侶与台湾－以淨土宗之布教為中心 1895年～1902年－」と題して報告を行った。本稿は同会により近日中に公刊の予定である。
- (3) 『比較文化史研究』2, 比較文化史研究会, 2000。なお、本稿の一部を中国語にて発表した論考が、「日本殖民統治初期布教使眼中之台灣佛教」(『史聯雜誌』35, 中華民国台湾史蹟研究中心, 1999) である。
- (4) 同註2, 頁384。
- (5) 同註1, 頁29-30。
- (6) 台湾總督府文教局社会課, 1943。

- (7) 以下、妙心寺派と略記する。
- (8) 同註6, 頁58。
- (9) 『史苑』58-2, 1998。
- (10) 『台灣史研究』16, 台湾史研究会, 1998。
- (11) 「日据時期臨濟宗妙心寺派日僧東海宣誠來台經營佛教事業的策略及其成效」(一)、
(二) (『妙林』9-1・2, 1997)。『日据時期台灣佛教文化發展史』(南天書局, 2001)。
- (12) 「日据時期台灣佛教史二論」楊惠南・糸宏弘編『台灣仏教学術研討会論文集』(台灣青年文教基金会, 1996)。「略論日僧東海宣誠及其在台之佛教事業」(『圓光佛學學報』3, 圓光出版社, 1999)
- (13) 「圓山臨濟寺的歷史」(『妙林』9-10, 1997)。
- (14) 以下、臨濟寺と略記する。
- (15) このことについては、胎中がすでに同註10頁3において指摘している。
- (16) 「創業の人、守成の人」『正法輪』324, 1914)。『正法輪』は妙心寺派正法輪会によつて発行された妙心寺派の雑誌である。
- (17) 黄葉秋造編『鎮南記念帖』1913, 「鎮南山縁起」頁3。ただし、江木生「内地佛教の台灣伝来と其現勢」(『台灣仏化』1-1, 1937) によると細野の来台を明治29(1896)年としている。
- (18) 法名は松本無住という。
- (19) 同註16。
- (20) 同註10, 頁2-3。
- (21) 「南清」とは中国南部のことを指す。
- (22) 「南征一行」・「任命」(『正法輪』66, 1897)、及び大崎文溪「澎湖島通信」(『正法輪』66, 1897) を参照。
- (23) 同註17, 頁3-9。
- (24) 同註17, 頁11-12。
- (25) 同註17, 頁12-13。
- (26) 同註17, 頁14-20。
- (27) 同註17, 頁21-23。
- (28) 同註17, 頁29-31
- (29) 同註17, 頁33-38。

- (30) 同註17, 頁38－41。
- (31) 「鎮南山臨濟護国禪寺」の部分参照（台灣社寺宗教刊行会, 1933）。また、同註17では明治32(1899)年12月19日基隆着とある。
- (32) 同註16、及び同註17, 頁41－44。
- (33) 同註17, 頁49－50。
- (34) 伊沢紹倫「南針記」(『正法輪』67, 1897)を参照。
- (35) 同註17, 頁46－53。
- (36) 同註17, 頁53。
- (37) 同註31。
- (38) 同註17, 頁54。
- (39) 同註31。
- (40) 同註17, 頁54－56。
- (41) 関弘道「础礎軒梅山玄秀師」(『正法輪』453, 1920)を参照。
- (42) 『明治四十五年台灣總督府公文類纂』十五年保存三十三卷第五門第四類十一「臨濟護国禪寺本堂建築費寄附金募集終了届進達」を参照。
- (43) 則竹玄敬「本師得庵玄秀老大師年譜」・「我足跡」(京都妙心寺内靈雲院の則竹秀南老師所蔵)。則竹秀南師は則竹玄敬師のご子息であり、当資料の閲覧にあたって特に便宜を受けた。ここに感謝の意を示したい。
- (44) 同註42。
- (45) 同註42。本島人協力者の名前も總督府に提出された文書の中に散見される。
- (46) 京都大本山妙心寺所蔵。天球院久下保健師に提供をうけた。ここに改めて謝意を示したい。
- (47) 林も「円山臨濟寺的歴史」頁46－47で林蘇峰編『高林玄宝大和尚鼎談錄』(郷土を語る会, 1962)に基づき歴代住職に触れているが、資料不足の感が否めない。「僧籍台帳」を資料として使用することによってある程度補充することができるため、ここに提示することとした。
- (48) 大正5(1916)年10月創設。
- (49) 大正7(1918)年7月總督府認可。設立の詳細は林普易編『台灣宗教沿革誌』(台灣佛教月刊社, 1950, 頁5－10)参照。
- (50) 江燦騰は『台灣佛教百年史之研究』(南天書局, 1996)頁151で、両者の連携は實際

- はもっと早く大正5(1916)年には行われていたとしている。
- (51) すでにこの概略については、同註1「日据時期日本佛教之台灣布教」頁212において略述したが、ここでは少し詳しくその過程を述べていきたい。
- (52) 第一統計書(明治30年分)より第四十七統計書(昭和17年分)参照。ただし、第一統計書には宗教関係の統計が掲載されておらず、実際は第二統計書からの参照となる。台湾総督官房調査課。
- (53) 三者の相違点については、同註1「日据時期日本佛教之台灣布教」頁196-197参照。
- (54) 同註1「日据時期日本佛教之台灣布教」頁196-214参照。
- (55) 同註22。
- (56) 同註17、頁54。
- (57) 同註9、10、11、12、13参照。
- (58) 同註2、頁389-391。
- (59) 『正法輪』82・83、1898。

日據時期臨濟宗妙心寺派之臺灣佈教演變 —以建立臨濟護國禪寺的過程為主—

松金公正

摘 要

在日本殖民統治下的臺灣，存在著 8 宗 14 派的日本佛教組織，他們展開著各有特色的佈教活動。其中，臨濟宗妙心寺派，建立了鎮南山臨濟護國禪寺，以這個臺灣最初的純日本式寺院為發展據點，積極進行面向臺灣人的佈教活動。

但仔細看來，在這樣的過程中還有很多不明之處。妙心寺派剛開始佈教的情況為何？怎麼會想到修建日式大寺院？完成後的寺院，對以後的佈教發展能發揮什麼作用？對於這樣的問題，似乎還沒有人進行過深刻的討論。

為此，本文試將妙心寺派在臺佈教的變遷過程分為三個時期，具體探討妙心寺派對於臺灣佈教的看法及其變化，進而分析臨濟寺的落成對它帶來的影響。

透過本文這樣的分析，以下幾件事情就很明顯了。妙心寺派不像其他優勢宗派以從軍佈教為它佈教活動的起點，沒有參加從軍佈教。當時妙心寺派在臺佈教的目的，並不止於在本島的佈教發展，他們把臺灣視為向中國南部發展的轉運站。但過一陣子，妙心寺派不得不撤離中國南部，停止了該地區的佈教。梅山玄秀等人重新把臺北圓山精舍定為佈教中心，受到臺灣總督兒玉源太郎這麼有力的檀越之支持，開始專力建設前所未有的大寺院。到了 1911 年大雄寶殿終於完成，這是在臺灣第一次出現的擁有純日本式建築之寺院。這個臨濟寺落成後，妙心寺派又開始傾向在臺灣各地進行佈教。但其他日本宗派自從軍佈教時期就把自身的勢力擴大到臺北以外的城市，妙心寺派企圖向地方發展也面臨了很大的困難。在這樣的情況下，妙心寺派找到一條出路，開始把臨濟寺作為臺灣人修道的「根本道場」。繼承梅山任務的佈教師們，充分利用臨濟寺這個硬體設施，展開了各種各樣的佈教活動。譬如開辦附屬臨濟寺的鎮南學林、組織臺灣佛教道友會及婦人會、積極與臺灣僧侶進行交流等。

總而言之，妙心寺派開始在臺佈教的時候落後於其他宗派，但認識自己的落後反而促進了早期的寺院建設。而提早完成的寺院，對於以後的面向臺灣人佈教提供了良好的基礎。

(2001年 6 月 1 日受理)